2011.5.14　伯耆文化研究会　5月例会

八幡神社蔵・中村一忠奉納「三十六歌仙額」について

米子工業高等専門学校准教授　原　豊二

項目

1、「三十六歌仙額」発見の経緯
　『中村記』『伯耆志』などに既に記されている。
2、画像の検証→プロジェクター
　慶長時代の描画と元禄時代の描画に注意
3、中村一忠の奉納と内膳事件(慶長6年)
　奉納の目的としてどのようなことが考えられるか（徳川スタンダード）
4、竹内自安斎の文化活動と「歌仙額」の修復
　『清地草』の所蔵と『伯陽六社みちの記』の記述
5、今後の保存・修復と閲覧にむけて
　赤外線調査の後、剥落防止、現物の展覧
6、米子の和歌文化を考える
　江戸時代初期から和歌文化は受容され、後の自安斎や鷲見保明へ、さらに幕末へ

【参考資料Ⅰ】

八幡神社所蔵和歌資料　調査報告

①『清地草』刊本　全６０丁

出雲大社に奉納するために編纂された和歌集である。歌人には山陰地方の人物が多く見られる。米子の唐物商であった竹内時安斎(1638･1708)　の編纂である。元禄１５年（1702）刊。本来は上下巻であるが、八幡神社本は下巻を逸している。

『清地草』は稀書であり、伝本が少ない。神宮文庫（伊勢神宮）に上下巻、大阪市立大学附属図書館森文庫に上巻のみ、佐太神社（松江市鹿島町）に上下巻（ただし下巻は模写本、これは足立正による寄贈）、北島家（出雲市大社町）に上下巻２組が確認されている。これらは刊本であるが、大原俊二氏（米子市）所蔵本は下巻のみの写本である。これは、時安斎自筆のものと見られる。

八幡神社本はここに奉納されたものであろうか。『清地草』が編者である竹内時安斎の居住地近辺から発見された意義は大きい。下巻が所蔵されている可能性もある。

『近世和歌撰集集成地下篇』（明治書院・1985年）に翻刻が載る。

②『和歌論』写本　全８丁

神道色の強い歌論書である。江戸時代中期以降の書写と考えられる。冒頭部分を翻字する。

「和歌といふは日本のうたといふことなり和歌は神代にありて素尊の神詠に始るこれよりまへは諾尊の混本歌あれとも…」

③『古今三鳥三木秘訣』写本　全８丁

「古今伝授」に関連する和歌資料である。『古今集』に表わされる「三鳥」と「三木」に関わる秘伝を記す。文化１５年（1818）の書写か。奥書に次のようにある。

「享保庚戌之九月廿五日　文雄　敬識」

「天明四辰冬十月十二日於渾成舎謹写之　越智定■」

「文化十五年秋九月　京都吉田松岡氏ニテ写之　廣江　藤原重徳」

「筆者　備中後月郡井森神社　社主　三宅長門」

冒頭部分を翻字する。

「夫和歌ハ二神浮橋ノ言葉ヨリ起レリト知リテ天地即和歌ナル事ヲ知ラズ又素尊ノ五七五七々ノ言葉是和歌ノ体ナルコトヲ知リテ諾尊ノ…」

備考：八幡神社からはこれらの他にも和歌関連資料、広く文学資料が遺されている可能性があり、今後の調査が俟たれる。

【参考資料Ⅱ】

八幡神社・三十六歌仙　和歌解読（仮）

左１　柿本人麻呂
　ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ①

左２　凡河内躬恒
　住吉の松を秋風吹くからに声打ち添ふる沖つ白波②

左３　大伴家持
　かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける③

左５　素性法師
　音にのみきくの白露夜はおきて昼は思ひに敢へず消ぬべし④

左６　猿丸大夫
　遠近（をちこち）のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな⑤

左７　藤原兼輔
　人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな⑥

左８　藤原敦忠
　伊勢の海の千尋の浜に拾ふとも今は何てふかひかあるべき⑦

左９　源公忠

行きやらで山路暮らしつ郭公今一声の聞かまほしさに⑧

左１２　源宗于

ときはなる松の緑も春来れば今一入の色増さりけり⑨

左１３　藤原清正

天つ風吹飯の浦にゐる鶴のなどか雲居に帰らざるべき⑩

左１６　小大君

岩橋の夜の契りも絶えぬべし明くる侘しき葛城の神⑪

右１　紀貫之

大原やをしほの山の小松原はやこだかかれ千代の影みん⑫

右５　紀友則

夕されば佐保の川原の川霧に友まどはせる千鳥鳴くなり⑬

右６　小野小町

色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にざりける⑭

右７　藤原朝忠

（不明）

右８　藤原高光

（不明）

右９　壬生忠岑

有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂き物はなし⑮

右１０　大中臣頼基

一節に千代に込めたる杖なれば突くとも尽きじ君がよはひは⑯

右１１　源重之

夏刈りの玉江の葦を踏みしだき群れゐる鳥の立つ窓ぞなき⑰

右１３　源順

水の面に照る月次を数ふれば今宵ぞ秋の最中なりける⑱

右１７　壬生忠見

恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひ初めしか⑲

右１８　中務

秋風の吹くにつけても訪はぬかな荻の葉ならば音はしてまし⑳

※①～⑳は解読した和歌の通し番号。

【参考資料Ⅲ】

中村一忠と和歌

江戸時代初期に米子城主であった中村一忠(1590-1609)の伝記『中村記』には、興味深いことが書かれている。

一忠が国替えで米子に来て後、後醍醐天皇(1288-1339)から深田家に下賜された『古今和歌集』が一忠の手に渡った。この『古今和歌集』は、著名な歌人である藤原定家(1162-1241)の筆によるもので、時代・筆者ともに貴重な一書ということになろう。ところが、米子藩の重鎮であった横田内膳(1552-1603)はこれを奪い取り、しかも亡失してしまったという。このことに憤慨した一忠は、現在の米子市東八幡にある八幡神社で密議を交わし、内膳殺傷の計画を立てた。これが有名な内膳事件となり、横田内膳は横死、また御家騒動とされ、徳川家からは強い遺憾の意が伝えられた。そして、関係者の切腹へと事態は急変する。その後、中村一忠は二十歳ほどで急死し、中村家は御家断絶となった。この時、殉死した二人は、その死の前に辞世の和歌を詠み、その短冊を宙に投げたという。

さて、この『中村記』は一般に「実録物」という文芸ジャンルに属するもので、到底、歴史的な真実を伝えているわけではない。むしろ面白くなるように、相当な脚色を加えていると見てよいだろう。米子の街の基盤造りを担った横田内膳を一方的に貶めるというのは、やはりバランスに欠く。ここで重要なのは、むしろこの『中村記』が書かれた江戸時代中頃の米子の文化的な動向の方である。元禄時代には、竹内時安斎(1638-1708?)という人物が出雲大社に和歌集を奉納するなど、盛んに文芸活動を行っていた。そうした和歌文化を摂取した地域の知識層が、このような和歌にまつわる物語を創作したのではないだろうか。

ところが、米子の和歌文化はやはり一忠の時代まで遡るのではないかと最近考えるようになった。というのは、先の八幡神社から一忠奉納の「三十六歌仙額」が出て来たからである。絵は荻野正長で、この人物は狩野松栄(1519-1592)の門人という。長年の風雪で絵柄の状態は決して良くないが、中村時代の米子の文化状況を伝える資料としては最高の逸品に違いない。今後の学術的な調査の進展を俟ちたい。(原豊二・米子高専准教授)

〔好きです YONAGO かわら版（掲載予定）〕

【参考資料Ⅳ】新聞各紙